

「失語症者における構文ネットワーク構造の実証的研究」

熊本県立大学大学院 文学研究科

日本語日本文学専攻 博士後期課程 宮本 恵美

[論文要旨]

本研究では、失語症者の構文ネットワーク構造について認知言語学的視点から調査・分析することによって、現在行われている一般的な失語症の言語評価や言語治療の内容を再検討し、改善点を明確化し、新たな方法を提案した。

第1章では、本研究を構想するに至った理由である現在の失語症者に実施されている文レベルの理解や表出に関する評価法及び訓練法に関する問題点について取り上げた。また、その問題の理解を深めていくために、失語症者の言語機能にはどのような特徴があるのか、その概要を述べた。さらに、本研究の理論的基盤となる認知言語学の概要や「カテゴリー化」、「プロトタイプカテゴリー」、「ネットワークモデル」、「構文ネットワーク」、「使用基盤モデル」、「言語習得モデル」、「カテゴリーとしての動詞や格助詞」を取り上げ、具体的に述べた。そして、失語症者の格助詞の構文ネットワーク構造を明らかにしていくために、格助詞の「構文ネットワーク構造」に関して説明した。

第2章では、まず、失語症者の格助詞の使用について、どのような誤りが生じやすいのか、先行研究を通して概観した。そして、失語症者の格助詞「デ」の構文ネットワーク構造について、失語症者および健常中高年者の助詞の穴埋め課題や文想起課題を実施することにより、その特徴について明らかにした。その結果、助詞の穴埋め課題では「道具」と「場所」の用法が正答率の高い結果を示し、また、文想起課題では、「道具」→「場所」→「原因」→「様態」→「時間」の順に想起率が低下していた。以上のことから、中心的用法である「場所」や「道具」の用法については、失語症者は比較的良好に判断しているものの、「場所」から抽象化した用法である「時間」や、また、「道具」から抽象化した用法の「原因」などの周辺的な用法については、同じ格助詞「デ」であっても失語症者にとって難しい用法であると考えられた。

以上の分析結果をもとに、失語症者に実施する格助詞「デ」の評価法や訓練法についての提案を行った。まず、格助詞「デ」に関する評価法については、中心的用法の理解について調査する。その際には、聴覚的把持力に配慮し、2文節文を使用し、状況画に対応する正しい文カードを選択させる方法で行うことを提案した。また、訓練方法に関しては、評価結果をベースに完全には保たれていないと判断するところから開始すること、また、プロトタイプの用法である場所の用法や道具の用法のイメージ図を用い、コア的な部分の定着を図ることを提案した。

第3章では、失語症者の格助詞「ニ」の構文ネットワーク構造を明らかにするために、先行研究を取り上げ概説した。そして、失語症者の格助詞「ニ」の構文ネットワーク構造について、失語症者及び健常中高年者に対して、格助詞「ニ」の「穴埋め課題」及び「文想起課題」を実施すること、また、「文想起課題」においては、森山(2008)が実施した成人日本語母語話者(健

常若年者)とも比較することにより、その特徴を明らかにした。結果、失語症者の格助詞「ニ」の特に中心的用法である「移動先」の用法は比較的安定した状態にあるものの、特に周辺的な用法である「知覚主」の用法は、意味カテゴリー構造上、活性化しにくい状況となっているのではないかと考えられた。また、「時点」の用法は、助詞の穴埋め課題で高い正答率を示したものの、文想起課題では1文しか認められず、総合的に見ると島のような状況にあるのではないかと考えられた。

以上の結果を踏まえ、まず、評価法は、失語症者にとって比較的、理解や表出が容易であった「移動先」の用法から調査し、その後、徐々に周辺的な用法に移行していく方法を提案した。ただ、穴埋め課題の個別結果をみても、『動作の相手』と『存在の位置』のカテゴリーでは、被験者によって理解のしやすさに違いが生じる結果が認められたため、失語症者の全体的な傾向と個人の特徴の双方に配慮したきめ細かな評価法を実施する必要があることを示した。また、訓練法に関しては、プロトタイプ的な用法を繰り返し使用していくことやイメージ図を用いることによってスキーマ形成を図ること、また、個々の評価法の結果を反映させる形で周辺的な用法に移行していく方法を提案した。特に格助詞「ニ」は、その意味用法が多いため失語症者の誤りも生じやすく、その回復には非常な努力を要する。そのため、今回、認知言語学的視点から格助詞「ニ」のスキーマ的イメージを定着させるための方法を提案できたことは、本研究の成果として一定の価値があると考えられた。

第4章では、失語症者の格助詞「ガ」の構文ネットワーク構造について、明らかにするために先行研究を取り上げ概説した。そして、失語症者及び健常中高年者に対し、助詞の穴埋め課題と文想起課題を実施した。その結果、特に文想起課題の結果から、失語症者は、プロトタイプ的な用法である「動作主」が最も活性化しやすい状況にあること、それ以外の用法のなかで「赤ちゃんが欲しい」のように使用頻度の高い構文は具体的構文として定着しており、活性化するものの、スキーマ形成は不十分な状況にあることが示唆された。これらを踏まえ、失語症者の格助詞「ガ」に関する評価法や訓練法について提案した。まず、格助詞「ガ」の評価法については、文字刺激と聴覚刺激を用いた構文の格助詞穴埋め課題を用い、中心的用法の「動作主」の構文から開始し、次いで「変化主」、「存在主」、「属性主」、「動作の対象」などを調査し、プロトタイプ的な用法の定着度やスキーマの形成度について明らかにしていく方法を提案した。訓練法に関しては、中心的用法である「動作主」の用法からアプローチを始める必要があるのか、あるいは、周辺的な用法である「動作の対象」の用法から開始するべきかなど、各格助詞に関する意味用法別のネットワーク構造を想定し、詳細な評価を用いて、各失語症者がどのレベルまでの理解と表出が可能かを明らかにすることで、開始段階と訓練の遂行順などを設定することを示した。また、同時に状況画とイメージ図を用いながら、中心的な意味の定着を始め、周辺的な用法を図っていくことも提案した。

第5章では、失語症者の格助詞「ヲ」の構文ネットワーク構造について、明らかにするために先行研究を取り上げ概説した。そして、失語症者の格助詞「ヲ」の構文ネットワーク構造に

について、失語症者及び健常中高年者に対して格助詞「ヲ」の穴埋め課題と文想起課題を実施し検討した。文想起課題においては森山（2008）が実施した成人日本語母語話者の結果とも比較することにより、その特徴を明らかにした。結果、失語症者の格助詞「ヲ」の構文ネットワーク構造については、中心的用法である「対格」の用法は比較的良好に保たれており、一方、周辺の用法においては活性化しにくい状況にあると考えられた。以上の結果から、格助詞「ヲ」について新たな評価法及び訓練法を提案した。まず、格助詞「ヲ」の評価方法については、中心的意味用法である「対格」の用法から開始し、その後、周辺の用法である「起点」や「経路」や「時間」に移行していく方法、その際、状況画が使用できないような課題文を用いる際には、事前文を与え、場面を想定することとした。訓練法については、失語症者に意味用法別のコアな意味の定着を図るために、中心的用法である「対格」の用法をはじめ、周辺の意味用法についてもそれぞれのイメージ図を用いることを提案した。また、格助詞「デ」、「ニ」、「ヲ」、「ガ」全体の正答率を明らかにし、言語学で主張されている格助詞の優位性の階層をもとに分析し、失語症者は階層の中で優位性の高い格助詞である格助詞「ガ」と「ヲ」が理解しやすいことを示した。このことは、ある意味、失語症学の分野から格助詞の優位性の階層を裏付けることができたのではないかと考えられた。

第6章では、本研究のまとめとして、今まで失語症者に行われてきた評価法や訓練法の問題点や格助詞「デ」、「ニ」、「ガ」、「ヲ」全体の結果から考えられることについて取り上げ、今回の研究の成果および意義について述べた。

本研究で、認知言語学的視点から格助詞に着目した様々なパターンの課題文を作成し実施することによって、失語症者の格助詞「デ」、「ニ」、「ガ」、「ヲ」の構文ネットワーク構造について明らかにしたことは、失語症者への言語聴覚療法に大きな示唆を与えることとなった。また、格助詞が「多義」であること、且つ、格助詞がプロトタイプを中心としたネットワーク構造を築いているという認知言語学的な考え方を持っている言語聴覚士は少なく、そのような視点から系統立てた評価や訓練を行うことはなされていない。そのような中で今回のような提案ができたことは大きな意味があると考えられる。

本研究結果から失語症者は格助詞の構文ネットワーク構造は中心的な用法に関しては比較的良好に保たれており、活性化しやすい状況にあること、周辺の用法については、活性化しにくく、情報の往来が遮断されているような状況にあるということを示すことが出来た。さらに、今回の研究結果の失語症者は中心的用法については良好に保たれている場合が比較的多いということ踏まえ、格助詞の評価法について、構文ネットワーク構造上、保たれている可能性の高い中心的意味用法から評価を開始し、徐々に拡張パターン用法の理解や表出は可能かを調べていく方法や、その評価結果をもとにして、言語課題と共にイメージ図を視覚的に提示していくという認知言語学的視点から考案した訓練法を提案した。このことについても本研究の成果であると考えられた。また、本研究から得られた失語症者のネットワーク構造の特性は、プロトタイプカテゴリーの心理的実在性の妥当性を示す根拠となり、失語学への寄与だけ

ではなく、認知言語学の中で最も重要な枠組みの1つであるプロトタイプ理論の発展に大きく貢献ができたのではないかと考える。さらに、今回の研究結果から得られた失語症者の言語機能障害の特徴から認知的際立ち度やいくつかの言語現象に基づく階層性の実在性が支持されたことにより、認知言語学や言語学一般の理論を補強することになったと考えられた。